# ブーニンの作品に引用されているフェートの詩

何と寒い秋だろう！
ショールとコートをまといたまえ
ほら、まどろむ松から
まるで火事が起きているようじゃないか

北の夜の輝きを
私はいつも君のかたわらで思い出す
燐のような目が光るが
私を暖めることだけはしない

＊＊＊

森の静かな場所で
真夜中の嵐がざわめいた
私と彼女は隣り合って座っていた
落ちた枝は炎ではじけた

私たちの二つの巨大な影は
赤い床に伸び
心には喜びの火花もなく
何をもってしても、この霧を吹き払えはしない

壁の向こうで白樺がきしみ
樹脂の多い樅の枝もミシミシと鳴る
ああ友よ、君に何が起こったのか教えてくれ
自分に何が起きたのかを、僕はずっと前から知っているから

＊＊＊

なんという悲しみか！並木道の端は
再び朝から埃で見えなくなり
再び銀の蛇が
雪だまりの向こうから這い出してきた

空にはるり色の部分はひとかけらもなく
草原はどこまでも平らで、どこまでも白い
ただカラスだけが嵐にあらがって
重たげに翼をはばたかせている

魂は明るくならず
あたりと同じように寒い
死にゆく作業の上に
思考はけだるく降り積もる

もしかしたら偶然にでも
ふたたび魂が若返り
ふたたび故郷を見ることができるというような
心の中のあらゆる希望は朽ちていく

嵐がかたわらを過ぎるところ
熱い思いが清らかであるところでは
捧げられた者だけに見える
春や美が咲き誇っている